

保健体育科授業案

著者	杉山 慎一郎
雑誌名	教育研究協議会要項：共に創りあげる授業：「教科ならではの文化」を味わう子どもたち
巻	平成30年度
ページ	112-119
発行年	2018-10-12
出版者	静岡大学教育学部附属静岡中学校
注記	題材名：「球技 ネット型 インディアカ」-空いたスペースをめぐる攻防を生み出す-
著者版フラグ	author
URL	http://hdl.handle.net/10297/00026748

保健体育科授業案

授業者 杉山 慎一郎

- 1 日 時 平成 30 年 10 月 12 日 (金) 第 2 時 11:20~12:10
- 2 学 級 3 年 C 組 (体育館)
- 3 題材名 「球技 ネット型 インディアカ」
ー空いたスペースをめぐる攻防を生み出すー

4 題材の目標

インディアカに対して取り組みやすさを感じた子どもたちが、自分たちが行ったゲームから得た動きに対する課題を根拠に、ボールのつなぎ方や守備のフォーメーション、役割分担、スパイクのコースなど、動きの課題を解決できるように作戦を考え、試行することの繰り返しを通して、達成感や仲間との一体感などの心地よさを感じながら、空いたスペースをめぐる攻防についての考えを深め、体現しようとする。

5 題材観

(1) ニュースポーツの概念

現在、ニュースポーツとして様々なスポーツが提案されています。新たに考案されたり、導入されたりしたニュースポーツは、勝敗にこだわらずレクリエーションの一環として気軽に楽しむことに主眼を置いています。そのため、どの年代の人にとっても親しみやすく、体を動かす楽しさを感じやすいスポーツとして継続的に行っていくことができたり、用具や場所、ルールを工夫することにより、初心者から熟練者までさまざまなニーズに応じて展開できたりすることが特徴です。

一般的に「スポーツ」というと「競技スポーツ」を思い浮かべる人が多いのではないのでしょうか。選手が懸命に練習に取り組み、その集大成として参加する大会は、見ている人にとっても大きな感動があります。ルールは統一されており、国や地域の違いによって変化するものではありません。これは、長い年月の中で、平等に勝敗を競えるよう変化してきたものでしょう。現在では競技スポーツとなっている種目であっても、その起源をたどると別の見方ができるものもあります。例えば、バレーボールは、バスケットボール（身体接触や硬いボール）が婦女子には不向きであるということから、テニスにヒントを得て考えられたものが始まりです。そのテニスの始まりも、フランス修道院の回廊で手の平や手袋を使って、球の打ち合いを楽しんだことが始まりです。これらのスポーツは、誰でも楽しみながら取り組むことを願って創られたものであると言えるでしょう。

つまり、現代におけるニュースポーツの考え方は、スポーツに対する考え方の源流と言えるのではないのでしょうか。

(2) インディアカ

① インディアカの起源と普及

インディアカは羽根のついた特殊なボールをネット越しに手で打ち合い、得点を競い合うスポーツです。ブラジルで行われていた伝統的なゲーム「ペテカ」にヒントを得て、ドイツのスポーツ教師であったカールハンス・クローンがレクリエーションスポーツとして 1930 年代に考案しました。



1970 年、ドイツ・スポーツ連盟は「トリム運動」を発足させました。これは、レクリエーションスポーツ、健康スポーツを広く普及させることを目的とした運動です。トリム運動の中では優れた用器具が「この年のトリム用具」として認定されていますが、インディアカボールは 1972~1973 年に最も優れた用具として表彰されています。

このようにインディアカは、年齢、性別などを問わず、すべての人たちが楽しむことができるように創られ、発展してきたスポーツなのです。

② ネット型スポーツとしてのインディアカ

インディアカは、コート上でネットを挟んで相対し、ボールを打ち合う競技であるため、ネット型スポーツであると言えるでしょう。また、返球するためのラケットを用いず手で扱い、相手に返球するまでに仲間と何度かボールに触れてよいので、バレーボールに近いスポーツであると考えられます。

他のネット型スポーツと大きく異なっている点は、その独特なボールにあります。インディアカボールは球状ではなく、羽根がついているため、小さいボールの滞空時間を長引かせることができ、ねらった方向にとぼしやすくなっています。そのため、複雑な操作を必要とせず「手の平に当てる」ということがボール技能の中心となります。

また、手の平に当てる部分は柔らかく、けがに対する危険が少ないため、



ボールに対する恐怖心を感じにくいと考えます。これらのことから、インディアカは仲間同士でボールをつなぎやすいスポーツであると言えるでしょう。さらに、守備のフォーメーションや仲間との役割分担について工夫することで、ボールをつなぎやすくなります。ボールのつなぎやすさは「レシーブ→トス→スパイク」という流れの三段攻撃を生み出しやすいと言えるでしょう。また、攻撃するときにも工夫することが可能になるでしょう。相手のコートの奥や二人の間をねらったり、コートの奥をねらうと見せかけて前にボールを落としたりと、攻撃にも工夫の余地が多くあります。

ボールをつなぎやすいという特徴は、自分たちが考えた作戦や約束事を体現しやすくなることにつながります。自分たちが考えた作戦や約束事が思った通りに体現できる場面が増えていくことで、自分たちの動きがよりよくなっている実感をもつことができるでしょう。その実感は、自分たちの動きについて、さらに思考し、体現しようとする支えとなり、思考と体現の繰り返しにつながっていくと考えています。

以上のように、ボールをつなぎやすいという特徴が、守備や攻撃の工夫や体現できた実感、それによる思考と体現の繰り返しを生みやすくと考えます。

(3) 空いたスペースをめぐる攻防

インディアカでは、攻撃側の視点に立てば、防御側のブロックやレシーブを含めたフォーメーションに対応して、スパイクやフェイント、仲間と連携した三段攻撃によって得点しようとします。また、防御側の視点に立てば、仲間の特徴を活かし、連携したフォーメーションや動きによって、相手の攻撃に対応し、ボールをつなごうとします。

このような攻防が連続することでラリーとなり、自分たちが得点したときの喜びや達成感をより大きくするものと考えています。つまり、互いのチームが空いたスペースをめぐる攻防を繰り返すことにインディアカのおもしろさがあるのです。

ラリーの連続の中で、相手の虚をつくようなフェイントをしかけたり、ねらった場所にスパイクを決めたり、あるいはその攻撃を見事にレシーブしたりする姿は、試合をしている人だけでなく、みている人にとっても、魅力的に映るでしょう。

(4) 本題材で味わう保健体育科ならではの文化

「自分たちが行ったゲームから得た動きに対する課題を根拠に、空いたスペースをめぐる攻防について、仲間と作戦を考え、体現しようとする」と本題材で味わう「保健体育科ならではの文化」とします。自分たちの考えた動きが体現できた達成感や仲間との一体感などの心地よさを感じながら、様々な視点から自分たちの課題をとらえ、思考することと体現することを繰り返していく子どもたちの姿を期待しています。

(5) 題材と子どもたち

インディアカを行うことは、初めての経験となる子どもたちが多いでしょう。インディアカボールは、子どもたちがもつボールという概念とは異なる作りになっています。そのため、インディアカボールに触れ、プレイをすることに、未知の競技を経験するおもしろさを感じ、積極的にボールに触れようとする子どもたちの姿が期待できると考えています。

また、高度なボール技能を必要としないインディアカでは、子どもたちは技能差をあまり感じることなく取り組んでいくことができると考えています。このことは、自分の考えを仲間に伝えやすくなり、自分たちの考えを積極的に体現しようとしたりする姿勢にもつながっていくでしょう。

インディアカでは、ラリー終了時に得点が入るスポーツなので、得点をつけながら試合を進め、最終的には勝敗がつきます。しかし、思考したことを体現しようとする子どもたちは、単に勝敗にこだわるだけではなく、仲間と思考したことを体現できた達成感や、仲間との一体感を味わっていくでしょう。そのような中で、さらに課題を見つけ、作戦を考え、体現しようとすることを繰り返す子どもたちの姿が見られることを願っています。

インディアカを行うことで、運動することの心地よさを感じることができた子どもたちは、

インディアカが、日時や場所を選ばずに行うことができるスポーツであると感じていくでしょう。また、思考と体現が繰り返されていくことで、自分が運動することに加え、みる立場から、気づくことが増えたり、助言ができるようになってきたりするでしょう。これは、生涯スポーツとして「する、みる、支える」という多様なかかわり方につながっていくと考えています。

インディアカという題材を通して、自分たちなりの合理的な動きへの考えが深まり、運動に対する多様なかかわりをしようとする子どもたちの姿を期待しています。

参考文献：一般社団法人 日本インディアカ協会(1998)『インディアカ教本』

公益財団法人日本レクリエーション協会

一般社団法人 日本インディアカ協会(2001)『インディアカ競技規則』

公益財団法人日本レクリエーション協会

参考資料：師岡文男 (2017)「オリンピック・パラリンピックとニュースポーツ」

『体育・スポーツ経営学研究』第30巻 日本体育・経営学会

6 新学習指導要領との関連

E 球技

球技について、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

(1) 次の運動について、勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、球技の特性や成り立ち、技術の名称や行い方、その運動に関連して高まる体力などを理解するとともに、基本的な技能や仲間との連携した動きでゲームを展開すること。

イ ネット型では、ボールや用具の操作と定位置に戻るなどの動きによって空いた場所をめぐる攻防をすること。

(2) 攻防などの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えること。

(3) 球技に積極的に取り組むとともに、フェアなプレイを守ろうとすること、作戦などについての話し合いに参加しようとする、一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとする、仲間の学習を援助しようとするなどや、健康・安全に気を配ること。

7 題材構想(全9時間)

(1) インディアカボールに親しむ(1時間)

(2) 守備について考え体現しようとする(3時間)

(3) 攻撃について考え体現しようとする(2時間)

(4) 動きの課題から作戦を考え、思考と体現を繰り返す(2時間 本時はその1)

(5) インディアカカップ in 附中を開催する(1時間)

(1) インディアカボールに親しむ(1時間)

授業者は事前に子どもたちとチームを決めておきます。一チームの人数は4～5人、男女混合とします。チームを決める際には、今までの保健体育での子どもたちの経験から、球技のおもしろさの一つである「競った展開」ができるチーム分けについて考え、決めておきます。

授業者は、各チームに一つずつインディアカボールを配付します。子どもたちはあまり見たこと

がないボールに対して、驚きや戸惑いの声をあげるでしょう。そこで授業者は、イメージするままにチームでボールを扱ってみることを提案します。子どもたちはインディアカボールを投げたり、蹴ったり、仲間とボールを打ち続けようとしたりするでしょう。インディアカボールに対してどの行動をとる子どもたちも、ボールそのものがもつ扱いやすさや怪我に対して危険が少ない安心感を得ながらボールに親しんでいくでしょう。

子どもたちがボールに対して扱いやすさを感じたところで、授業者は、手でボールを打ち続けているチームを全体に紹介します。仲間がボールを打ち続けている姿を見ながら、子どもたちは感嘆の声や応援の声をあげていくでしょう。そこで授業者は、チームでボールを打ち続けてみることを提案します。

ボールを打ち続けるためには、ねらった場所にボールをとばす必要があります。そのため、子どもたちは「手のひらでボールを打つ」ことが重要であることに気づいていくでしょう。中には、手首のスナップや膝の動きとの連動について意識し始める子どもも出てくるかもしれません。授業者は「どのようにすればボールをねらった所にとばすことができるか」について問いかけながら子どもたちにかかわっていきます。授業者は、ボールを打ち続けることを十分に味わった子どもたちと、それぞれがボールを扱うときに意識したことについて共有していきます。子どもたちからは以下のような意見が出されるでしょう。

- ・手の中心に当てることでねらった所にとばすことができた
 - ・手に当てる瞬間に手首のスナップを意識するとよい
 - ・膝の屈伸を使うとボールがとびやすい
 - ・床にボールがつきそうなタイミングでも、下に手を入れることでつなぐことができる
 - ・ボールを頭上で扱うときでも、下で扱うときでも、手の平にボールを当てることができれば、とばすことができる
 - ・手のひらに当てることができると音が違う
 - ・ボールをじっくり待ってから打てば、とばしやすい
- など

授業者は、全体で共有した後、ボールを連続で打つことができた回数をチームごと競うことを提案します。子どもたちは仲間と打ち続けることができた回数を数えながら、取り組んでいくでしょう。自然とボールを呼ぶ声や、名前を呼ぶ声、次に誰にボールをとばすか指示する声などが出てくるでしょう。授業者は子どもたちの温かな雰囲気称赞したり、一緒にボールを打つことができた回数を数えたりしながら、子どもたちと共に楽しみたいと考えています。

授業後の追求の記録には、このような記述が見られるでしょう。

- ・インディアカボールは痛くなくて、取り組みやすかった

- ・仲間を呼ぶ声が出ればボールがつながった。自分にボールをとばしてくれるようにもっと声を出したい
 - ・インディアカボールはあきらめずに追いかけることで、何とかつなぐことができる
 - ・インディアカボールをとばすコツをつかめた。手の平に当てることができれば遠くにとばすことができる
 - ・ボールをつなごうとした時には、下で打つ時と、上で打つ時がある。どちらの場合も手の平にあてることが大切であるが、その前に予測して動くことができるとよい
 - ・インディアカはどのように試合を行うのだろうか
- など

(2) 守備について考え体現しようとする(3時間)

インディアカボールを仲間と打ち合ったり、ボールのとばし方について考えたりした子どもたちを、授業者はネットを張ったコートを用意して迎えます。子どもたちは、インディアカがネットを挟んで攻防を行うであろうことを予想しながら、どのように試合をするのかについて期待感をもって授業にくるでしょう。

そこで授業者はインディアカのルールについて子どもたちに提示します。提示するルールは以下の通りとしますが、子どもたちがルールの変更について考えた場合については、全体で話し合いながら、柔軟に対応していくこととします。

- ・サーブはバドミントンコートのサービスラインからアンダーハンドで行う
- ・サーブは1本ずつ相手と交互に打つ。また、自チームのサーブは順番に全員が打つ
- ・ブロックがボールに触れた時は、1回に含まれない

以下の場合、相手の得点となる

- ・サーブのボールが2回連続でネットに触れた場合(1回目は打ち直しとする)
- ・相手側コートに返すまでに4回以上ボールに触る
- ・相手のサーブを上から1本で返す
- ・ボールをボールの外から相手コートに返す
- ・ボールを保持する
- ・同一人物が連続してボールに触る
- ・ネットに触る
- ・相手コートに侵入する

試合進行上の留意点

- ・得点板は得点したチームがめくること

- ・試合のない1チームは各コートに散らばって審判をすること

子どもたちとルールについて十分に確認をしてから試合に入ります。子どもたちは、前時で追求したボールのつなぎ方やとばし方を意識しながら試合を行っていきましょう。授業者は子どもたちがルールについて混乱することがないかを確認しながら、それぞれのコートを回っていきます。試合を始めた時は、打ち合うことを楽しんでいる子どもたちも、試合が進むにつれて、少しずつ動きの課題を感じ始めるでしょう。課題について話し合おうとするチームも出てくるかもしれません。そのような子どもたちの姿を確認したところで、授業者は子どもたちと、動きの課題について全体で共有します。

子どもたちからは以下のような動きの課題が出されるでしょう。

- ・スパイクを打つことができない
- ・トスの高さがちょうどよい高さにならない
- ・スパイクを打ちやすいトスの位置がわからない
- ・最初のレシーブができないため、ボールをつなぐことができない
- ・空いているスペースにボールが落ちてしまう
- ・レシーブでどこをねらえばよいのか
- ・動きながらレシーブをすることは難しいので、相手のボールがどこに来るのかを事前に予測したい
- ・誰がどこを守っていくのか役割分担をしたほうがよい

など

子どもたちからは、ボールが落ちて相手の得点になってしまうことについての課題が多く出されることが予想されます。そこで授業者は、ポジションや役割分担を決めていくために、ボールがどこに落ちるのかを記録していくことを提案します。審判になっている子どもたちに、コート図を配付し、1点ずつどこにボールが落ちたのかを記録していくように促し、再度試合に入ります。子どもたちは、ボールが落ちた場所を記録していくことで、空いたスペースや仲間の動きに着目していくでしょう。授業者は記録をしている子どもたちに、コートのどこにボールが落ちることが多いかを問いかけていきます。

授業者は、どこにボールが落ちたか記録したコート図をまとめ、全チームに配付します。そして、そのコート図を参考にして、守備のフォーメーションについて考えていくことを提案します。また、子どもたちは、ブロックは守備において、相手の

攻撃をとめるものと捉えていることが予想されま
す。そのため、ブロックに跳べば、相手のスパイクコースを限定できることを子どもたちと確認し
ます。

子どもたちは、守備のフォーメーションについ
て以下のように考えていくでしょう。

- ・コートの中でも満遍なく守ることができるようにひし形にしてみてもどうか
- ・ブロックを身長の高い人にする事で相手の攻撃を限定できる
- ・コートの中真ん中にボールが落ちることが多いので、レシーブの得意な人を配置する
- ・コート隅をねらわれることが多かったから、右と左の隅に一人ずつ配置する
- ・自分たちのチームは右利きの人が多いから、相手からきたボールを右手で扱えるように配置しよう
- ・後ろの人は強いスパイクを取る人、前の人は簡単なボールを取る人にする
- ・トスをする人を決めておくことで、レシーブでねらう場所をはっきりさせよう

など

授業者は、どのようにフォーメーションを決めたのか、子どもたちの考えを確認していきます。また、フォーメーションが思い浮かばないチームには、ボールが落ちた場所を記録したコート図と一緒に確認したり、ブロックの有無についての考えを引き出したりしながら積極的にかかわります。

子どもたちが守備のフォーメーションについて十分に考えたところで、再度試合を行います。子どもたちは、自分たちの考えたフォーメーションを体現できるように試合に取り組んでいきましょう。自分たちの意図通りにボールをつなぐことができた時には、達成感を味わい、仲間とともに喜び合う姿が見られるでしょう。フォーメーションがうまく機能していないと感じた時には、試合中に少しずつ配置を修正する姿も見られるかもしれません。授業者は子どもたちの配置を意識した動きや、それによってボールが繋がった瞬間を逃さないように、各コートを回りながら、子どもたちの動きを認めていきたいと思えます。授業の最後には、どのような考えをもって守備のフォーメーションをつくったのかを共有する時間を設けることで、子どもたちは、他のチームと自分たちのチームのフォーメーションを比較することができるでしょう。

授業後の追求の記録には、このような記述が見られるでしょう。

- ・守備のフォーメーションを考えた時にねらったとおりのところにボールがきたので、ボールをつなぐことができた
- ・ボールが来てから動くことは難しいので、フォーメーションを決め、どのようなボールを取るかを決めておく必要がある
- ・ブロックのすぐ後ろにボールを落とされてしまう。相手のフェイントを取る専門の人をつくってもよいだろう
- ・他のチームと比較すると、後ろに配置する人数が少ない。後ろをねらわれた場合についても考えておく必要があるのかもしれない
- ・フォーメーションを決めても、少しあいまいになってしまうところもある。声をかけあってボールを拾っていききたい
- ・相手に応じて、攻撃をねらってくる場所が違うので、フォーメーションを使い分けてもよい
- ・レシーブをした後のことまで考えたフォーメーションにしていきたい。トスをする人を決めておくべきだろう
- ・相手の守備がよくなってきたことで、なかなか攻撃が決まらなくなってきた。相手の空いたスペースがどこかを探しながら攻撃していきたい

など

- ・相手のフォーメーションから、空いているスペースにスパイクを打てば、得点ができるのではないか

など

ここで、授業者は、ラリーの中で、スパイクのコースやスパイクを打つ場所を工夫しているインディアカの試合動画を子どもたちに提示します。子どもたちが攻撃を考えていくためには、どのような工夫があるのかについて視点をもつことが必要であると考えからです。その後、どのような攻撃の工夫が見られたかを問います。子どもたちは以下のように発言するでしょう。

- ・スパイクを打ちやすいように高いトスを上げている
- ・フェイントを織り交ぜて、空いたスペースをねらっている
- ・スパイクを打つ人が二人いて、どちらから打つかわからないようにしている
- ・同じ場所から打つ人が違うコースを打ち分けている
- ・ラリーが続いた時には違うコースを打つことで、相手は取りにくくなる

など

(3) 攻撃について考え体現しようとする (2時間)

守備のフォーメーションについて考え、ボールがつながり始めた子どもたちは、攻撃についても考えたいくなるでしょう。相手が守備について考え、体現しようとするれば、攻撃は決まりにくくなりますし、自分たちがつなげたボールは、攻撃して返したくなっていくはずです。

授業者は、子どもたちの感想にそのような記述が見え始めたところで、全体で攻撃に関する動きの課題を共有する時間をとります。

子どもたちは以下のような動きの課題を出していくでしょう。

- ・ジャンプして返すことが難しい
- ・返すことが精一杯で強く打てない
- ・スパイクを打つ人が打ちやすいトスを上げたい
- ・相手に拾われていると先に自分たちがミスしてしまう
- ・スパイクを打つべきか、フェイントをするべきか迷ってしまう
- ・スパイクを打つ人が一定になってしまい、相手にわかっている

子どもたちからこのような意見が出されたところで、チームごと攻撃の作戦を練る時間を設定します。子どもたちは動画と、前時までに各チームが追求した守備のフォーメーションを参考にしながら、自分たちなりの作戦を考えていくでしょう。

- ・トスをする人と、スパイクを打つ人で役割分担をしたほうがよい
- ・スパイクは奥に打つほうが決まりやすいのではないか
- ・最初の攻撃はフェイントをして、2本目の攻撃でスパイクを打とう
- ・両方のサイドから二人で攻めるようにする
- ・スパイクが得意な人にスパイクをたくさん打ってもらおう。打つコースを増やしていきたい
- ・右側から打つ人と左側から打つ人で、打つコースを変えてみる
- ・守備のフォーメーションを三角形にしているチームにはフェイントが有効になるのではないか

など

授業者は、各チームを回りながら、子どもたちに作戦を決めた意図を確認していきます。仲間や相手の特徴を捉えていたり、相手の守備のフォー

メーションを捉えていたりするチームには称賛の声をかけていきます。

子どもたちが攻撃の作戦について考えることができたところで、授業者は試合を行うことを提案します。また、試合では、どの場所から、どのコースにスパイクやアタックをすることで得点することができたかについて、スパイクは実線で、アタックは点線で表すことを確認しつつ、審判の子どもがコート図に書くことを提案します。子どもたちが、どの攻撃が相手に通じたかをデータとして確認することができるようになるからです。

授業者は、各コートで試合が行われているときには、審判の子どもが記録を確実に取れているかを確認したり、スパイクが決まったチームを称賛したりしながら、子どもたちにかかわります。子どもたちからは、得点することができた際には、考えた作戦を体現できた達成感から、仲間と認め合う姿が見られるでしょう。また、作戦がうまくいかないときには、もう一度作戦を確認する声をかけたり、指示の声を出ししたりしながら、作戦が体現できるように仲間とかかわる姿が見られるでしょう。攻撃の作戦についてさらに考えていく際には、その参考になるように、どの攻撃が相手に通じたかを記録したコート図を配付していきます。

授業後の追求の記録には、このような記述が見られるでしょう。

- ・考えた作戦がうまくいき、得点をたくさんとることができた
 - ・スパイクを前の人が打つと見せかけて、後ろの人が打つという作戦がうまくいった
 - ・対角線上にスパイクを打つと決まりやすい
 - ・作戦を決めたが、まだボールをつなぐことができないため、発揮することが難しかった
 - ・トスの高さをもう少し高くしないと思うようにスパイクを打つことができない
 - ・スパイクを打ってもブロックされてしまい、その後何とかすることが難しい
 - ・毎回自分の得意なコースに打っていると相手によまれてしまう
 - ・守備のフォーメーションから攻撃に移りやすいようにフォーメーションを考え直したい
- など

(4) 動きの課題から作戦を考え、思考と体現を繰り返す(2時間 本時はその1)

守備と攻撃について考えた子どもたちは、各チームによって考える動きの課題が変わっていくでしょう。そこで授業者は、チームごと課題を伝え

合った後、作戦を考える時間を設定します。課題を捉えやすくするために、個人から出た課題とチームとして決めた課題、それを解決するための作戦を整理できるワークシートを配付します。子どもたちは、それぞれが感じた課題を伝え合い、チームとしての課題を設定していくでしょう。そして、ボールが落ちやすい場所や攻撃が決まりやすい場所のデータを参考にしながら、作戦を決めていくでしょう。以下は子どもたちの対話の例です。

- A : ブロックの後ろにボールを落とされてしまう
B : 前にいる人がフェイントを取るようになる
C : 右側の人をフェイント専門にするのはどうか
- A : 前回の試合ではボールを後方に落とされることが多かった
B : 後方であることに加えて、コートの左側にボールが落ちる
C : 左側にいる人がコートの角まで下がることにする
- A : 前回セッターをやったが、ネットから離れた場所でトスを上げることは難しい
B : ブロックをした人がそのままセッターになってみてはどうか
C : 役割が変わるから試合前に練習をしたい
- A : 得意なコースに打っていることが、相手に分析され始めている
B : 左右に打ち分けてみてはどうか
C : フェイントを織り交ぜることもできる
- など

授業者は、子どもたちの考えている作戦が、動きの課題を解決する作戦になっているかどうか確認するようにかかわります。作戦を考えることができたチームは、練習をしてもよいこととします。作戦を考えた子どもたちは、その作戦を試すため、試合をしてみたくなるでしょう。そこで、授業者は試合と作戦タイムを交互に設けることを提案します。

授業者はそれぞれのチームが考えた作戦を把握しておき、その作戦が発揮されている場面で子どもの動きを認めていきます。また、作戦タイムでは、直前に考えた作戦が体現できたかどうかを確認しながら、体現できているチームには次の課題が考えられるように、体現できなかった場合には、作戦が体現できるような視点を示しながらかかわります。

子どもたちは、作戦を試行することで、その作戦を練り直したり、新たな動きの課題に対して作

戦を考えていったりするでしょう。それを繰り返すことで、子どもたちが自分たちなりの合理的な動きを創りあげる姿を期待したいと思います。

授業後の追求の記録には、このような記述が見られるでしょう。

- ・ 攻撃と守備の両面から作戦について考えることができた
 - ・ 明確に役割が分担できてきて、動きやすさにつながっている
 - ・ 仲間のよさを活かして、全員が活躍できるようなフォーメーションを考えることができた
 - ・ ねらいがないボールを返してしまうと相手から強いスパイクが返ってくるので必ずねらって相手に返すようにする
 - ・ セッターにうまくボールが返らないときに、誰がトスを上げるのかを決めておきたい
 - ・ 攻撃のパターンがいくつかできてきたので、どの攻撃をするかサインを決めてきたい
 - ・ 相手のポジションを確認すれば、必ず空いているスペースがあるから、ねらっていきたい
 - ・ ポジションを決めるだけでなく、ボールが来た場所によってとる人を決め、迷いなく対応できるようにしたい
- など

(5) インディアカップ in 附中を開催する

(1 時間)

授業者はこれまでの成果を発揮する場として、インディアカップ in 附中を開催します。大会はトーナメント方式とし、どのチームも2試合以上試合ができるように事前に対戦相手を決めておきます。

試合をする中では、自分たちの作戦が発揮できるように、声をかけ合いながらプレイする子どもたちの姿が見られるでしょう。また、指示を出したり、応援したりする姿も見られるでしょう。作戦がうまく機能しないときには、プレイとプレイの間に人の配置や役割について互いに確認したり、試合間に作戦の課題について話し合ったりする子どもたちの姿が見られることを期待しています。授業者は、子どもたちが思考したことを体現できている場面を認めながら、子どもたちと共に、まとめの大会を楽しみたいと思います。

授業者は、まとめの大会終了後に、チームで集まって感想を書くことを提案します。子どもたちは、作戦が体現できた場面を認め合いながら、自分たちのプレイを振り返っていくことでしょう。

本題材を終えて、追求の記録にはこのような記述が見られるでしょう。

- ・ 相手にとられないようにスペースを見つけて攻撃したり、人と人の中をねらって攻撃したりすると、相手にとってとりにくい攻撃になる
 - ・ どうしてもフォーメーションでうめることができないスペースも出てしまうので、相手の攻撃を予測することが大切だ
 - ・ 守備から攻撃につなげやすいフォーメーションを考えたことで、セッターにちゃんとボールが返せたり、ねらったコースにスパイクを打ったりすることができた
 - ・ 球技ではボールをうまく扱うことができないことが多かったが、インディアカでは何とかボールを扱うことができたし、それを仲間に認めてもらうことができてうれしかった
 - ・ 自分たちで決めた作戦が発揮できた場面が多くあってうれしかった。仲間と課題について考えたり、動きを確認し合ったりした成果だ
 - ・ 全員が活躍できるようなポジションにしたことで、チームプレイができてよかった。全員が活躍できるようにすることと、自分たちの作戦を発揮しやすくなることはつながっている
 - ・ たくさんの作戦を考えたことで、自分たちの動きがよくなっていることを感じた。攻守両面から考えたので、新たな課題を毎時間見つけながら取り組めた
 - ・ 今回の授業で考えた相手のスペースを利用することは、バレーボールなどの他の競技においても同じことが言えそうだ
 - ・ どの競技でも、作戦などを考えてから実行しようとするのが大切だと感じた
- など

子どもたちが、本題材を通して、インディアカそのものを楽しむとともに、自分たちなりの合理的な動きへの考えが深まり、運動に対して多様にかかわる姿勢につながっていくことを願い、授業を閉じます。